

1. inspire

この単語を見てホンダのインスパイアを思い浮かべる人もいるだろう。ところでホンダはなぜインスパイアと名付けたのか。パソコンを立ち上げ、「ホンダ インスパイア ネーミングの由来」で検索をかける。トップにHONDAお客様相談センター、ネーミングの由来がヒットする。で、このページを開くと「Hondaのクルマがどのような思いを込めて名付けられたのか、ご覧いただけます。」とのリード文の下に各種車名の由来が並ぶ。インスパイア。曰く「インスパイア(INSPIRE)には『INSPIRATION (インスピレーション)、靈感 (ひらめき) を与え、感動させる』という意味があります。高級車の在り方を新たな視線から見つめ直したインスパイア。スポーティーでシャープな響きをもつネーミングがリニアで高質な走りを予感させます。」(<http://www.honda.co.jp/customer/faq-auto/modelname/index.html>)

以上の操作を経て、inspire になるほどと得心がいく人がいるかも知れない。加えてここで inspire と inspiration の関わりに気付く可能性もあるだろう。

inspire を Oxford Dictionaries の Web サイトで検索すると breathe in (air)との定義が見られる (<http://oxforddictionaries.com/definition/english/inspire>)。なぜ inspire が息を吸うとなるのか。

inspire は聖書の創世記との関わりが深い単語であり、例えば西欧のキリスト教信者であれば、同 2 章 7 節「主なる神は、土 (アダマ) の塵で人 (アダム) を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。」(日本聖書協会訳による)を想起する人も多いのではなかろうか。アダムの名が土に由来していることが明示しているように、聖書の語り手は人の肉体が価値のないものから造られていると、ことさら強調している。だがその一方で、人の体内に、実は神と同質のものが宿っているという、心ときめく秘密を打ち明けることも決して忘れていない。それが神の息なのだ。しかも重要なことに、この御わざによって人は生きる者となった。即ち人となったのである。試みに動物の創造を同じ章で追ってみよう。2 章 19 節「主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。」(同訳)。案の定、神の一息が動物に吹き込まれたという形跡はどこを探しても見当たらない。とするなら、人の創造において、神が人にだけ息を吹き入れられたことは決定的な

できごとである。なぜならこのことにより、人は神と直接つながるチャンネルを手に入れたことになるからだ。しかもこの不可視のマテリアル (spirit) は人の外から吹き込まれている。だから **inspiration** は外から不意に訪れるのである。

2. 理解への道筋

理解に至る経路は一樣ではない。たとえ到達地点が同じであっても、人によって出発点異なるからである。車が好きで、ホンダ・インスパイアのごひいき筋であれば、ホンダ車から出発して **inspire** の理解に達する道はごく自然な成り行きと言えるだろう。また聖書が身近なら、これとは異なる、宗教解釈上の小径を逍遙して **inspire** の意味領域を掌握できる高みに登ることもできる。理解するうえで大切なのは、自分の足で全ルートを踏破することだ。そのためには自分の場所から出発しなければ、第一歩を踏み出すことすらできない。

与太話をしよう。死期を悟った人は聖地ワラーナシー (かつて我々はベナレスと誤読していた) に赴く (人もいる)。しかしワラーナシーへの道はどこを出発点とするかによって異なる。当たり前だ。クアラルンプールからの空路とモーリシャスからの航路は、到達点と同じワラーナシーであっても、全く別のルートを辿らなければ行き着かない。これを無視して、ワラーナシーへのルート情報をラスベガス発のものに限ってしまえば、ヒンドゥ聖地への死出の旅はラスベガス経由と相場が決まり、死期間近のヒンドゥ教徒はラスベガスにひしめくことになるだろう。ところが驚くことに、これとよく似た光景は日本の学校に行けばたやすく実見できる。適当な教室に入りそこで行われている授業を参観すればよろしい。十中八九教師が一斉授業を行っている。そしてこの授業の過半が、ラスベガス経由ワラーナシー行きの道案内である。つまり生徒の立ち位置を無視した、理解への架空の道行きが教師の一人芝居で演じられているのである。

3. 対話の効用

対話の成立基盤は、対話する二者が自分の居場所から話を開始することにある。

*

以下、老齢の男と中1少女の対話。

「僕の顔の特徴って何だと思う？」

「えっ、ひげ？ ……白ひげめがね！」

「今頭の中で何やった？ 顔の特徴って何、は問いだよね。で、白ひげめがねはその答でしょ。問いから答を導くのに頭の中でやった作業は何？ 普通それなんて言ってる？」

「考える……？」

「考えるってことの中身は何？ 具体的に言うとどんな作業を考えながらやってるの？ だって僕の顔だけ思い浮かべてあれこれ考えたって、僕の顔の特徴は分かんないよ。」

「比較っていうこと？」

「そう、特徴を探るときに比較はすごく役立つんだ。だけどね、特徴をうまく見つけるには何と比べるかが重要。比べる相手によっちゃ、根本的な特徴が浮かび上がってこない。僕の顔の特徴は何って聞かれて、ナメクジと比べたって碌な答は出てこない。白ひげめがねって答えを出すときに何と比較した？」

「他の人の顔」

「OK。じゃ次の質問。人の特徴って何だ？」

「考えることができる……」

「うん、悪くない答だと思うけど、答を出す前にちょっと寄り道がしたい。あのさ、人の特徴を見つけるときに、何と比較するのが一番いいと思う？」

「サル」

「そうだね、ヒツジと比較するよりサルの方が、人にしかない特徴を導き出しやすい。でもサルの中でも比べるのに、いいサルとそうでもないサルがある。人の特徴を探るときに比較対象として一番いいのはサルの中でも何？」

「うーん、……チンパンジーかな？」

「凄い！ 正解！ でも何でチンパンジーと比べるのがいいの？」

「だって人に近いから」

「合ってる。今、近いと言ったよね。この『近い』はチョー重要キーワード。実に正確な表現。だけど君んちのそばにチンパンジーがいるの？」

「いるわけないじゃん」

「近いとか遠いって、比べてるもの同士の隔たりを表してるでしょ。でも現実には近くにチンパンジーがいる訳じゃない。それなのに、或る物差しを持ってきて測ると、人とチンパンジーは確かにメチャ近いんだよね。じゃ、その物差しって何？」

*

理解の範囲を広げるには、現在理解が及んでいる領域からの本人自身の踏み出しが必要である。一步踏み出すことで、未知の地点にまで理解が達した瞬間、人は、今まで自分とは全く無縁であった孤島に突然一本の橋が架かったように感じる。このとき無縁の孤島の位置が移動して、自分の意味の世界の中にストンと収まる。このように、新たな理解は従来の理解領域とつながることで成立する。このつながりを持たない知識（記憶と同義）は、理解の領土に組み込まれることなく、理解からは遠く隔たった無意味の海にポツンと取り残される。

子供時分にコニー・フランシスというアメリカ人歌手の「大人になりたい」という歌が流行った。巧みな日本語で歌われたその一節を私は次のように記憶していた。

「夢見る、夢見る。早く大人になりたい。お星様にそう祈るの。だけど夢見る。」

歌手名、歌の題名、加えて歌詞の一節。これら記憶のトリオは、取り立てて思い出されることもなかったが、記憶の水中深くたゆたっていたらしい。

後年三十路を過ぎた或る日、乗ったタクシーのラジオからこの曲が流れてきた時、メロディに引きずられるように記憶の水面から歌詞が浮かび上がってきて、思わず聞き耳を立てた。そして驚愕すべき事実に出くわした。歌詞が全く違っていたのだ。

「Too Many Rules, too many rules, 早く大人になりたい。お星様にそう祈るの。だけどtoo many rules.」これは、今は亡きマージナルマンの嘆きの歌ではないか！なるほどそれなら早く大人になりたいのも道理だ。この認識を得た瞬間、この歌は私の脳内・青年期カテゴリー・ボックスの一角に地位を占めるものとなった。理解が及ぶという事態は、既に構築されている理解の領域の然るべき箇所に、今まで未知であったものが明確に位置づけられることを指す。

一斉授業の限界は、生徒各人が理解する領域への踏み込みが困難な点にある。一方対話なら、相手の理解の及ぶ縁スレスレに話題を投げかけることだって（名人なら）できる。

こう書くと教師一人で大勢の生徒に対応することは不可能だと言い出す無教養な人が必ず出る。お生憎様。対話は教師一人と一人の生徒の間で成り立つものだけではありません。生徒同士でも十分対話はできます。

それにもう一つ。仮に教師・生徒の一对一の会話であっても、その会話が他の生徒の興味を引くものであれば、その教育的効果は実に大きい。理解に至るプロセスをオープンにすることは、疑問解決を目指す全ての人に大きなサジェスションと高いモチベーションを授ける。そもそも理解の光が届かない長いトンネルをくぐり抜けてようやく理解に到達した瞬間は、その場に居合わせた全ての人に感動的に伝わる

ものである。対話の技能を磨くことが、人の理解の範囲を広げる役に立つと確信するゆえんである。

(2013年1月)